

第11回共同利用・共同研究拠点等に関する作業部会（R8.6.22）での主なご意見

第11回共同利用・共同研究拠点等に関する作業部会（R8.6.22）において議論いただいた際の主なご意見は以下のとおり。

1. 共同利用・共同研究拠点等の機能強化の基本的な方向性についての具体化に向けて

（1） ネットワーク型拠点へのヒアリング

① 物質・デバイス領域共同研究拠点

【発表内容】

- ・異分野融合は、ネットワークを組めば自然に起こるものではなく、裾野の広さ、多様性、反復的な接触機会、受皿の制度設計がそろって初めて起きる。そのためには、受皿の制度設計並びに組織、制度の後押しが不可欠である他、拠点ネットワークとしての横断的な評価・持続的な資金スキーム、組織構造とガバナンスが重要である。
- ・拠点ネットワークを形成することにより、優秀な研究者との交流や経験豊富な技術職員による手厚い支援、装置や場所の共有ができる他、緊急事態が発生した際もネットワーク内で対応が可能であり、大きいスケールメリットがある。
- ・ネットワークは自然には機能せず、特に中核拠点において、実際には目に見えないマネジメントコストがかかり、全体として非効率になるリスクを含んでいる。
- ・認定経費が大学ごとに交付される方式による情報の非対称性やガバナンスの在り方の違いによる意思決定の非同期性、認定経費の不均衡のような構造的問題が課題である。
- ・問題点の解決のためには、公平、公正な運営を義務づけるため認定経費を中核機関に一元化、一体公募の統一ルール策定、相談窓口の設置、単独拠点と異なるネットワーク型に最適化した評価制度、拠点の規模を配慮した認定経費の設定などが必要になると考えられる。

【意見交換】

- ・ネットワーク型だからこそその広い裾野を持ち、その中で審査してシーズを上げていくことができるのは単独の拠点ではない強みである。
- ・研究者人口の減少が懸念されている中で若手を取り込んでいくことは重要であり、金銭的な支援だけでなく、ソフト面での支援も考えていくことが大切である。
- ・予算が限られており、人、リソース、装置を集めてシェアせざるを得ない現在の状況において、良い成功例の1つに思われる。
- ・構造的な問題点が挙げられているが、評価などの拠点関係の制度設計にかかわる部分と、大学の意思決定のガバナンスの部分は、分けて議論していく必要がある。

② 生体医歯工学共同研究拠点

【発表内容】

- ・ネットワーク型拠点の形成にあたっては、規模に応じた複数の学術専門分野の相互性、多種多様な分野にまたがったの支援や連携の一貫性、技術や人材の交流の広がりがメリットとして挙げられる。
- ・課題としては、予算が活動規模に追いついていない点、活動の多様化/広範化に伴い体制や成果の可視化が困難な点、研究所間に物理的・地理的距離がある場合に交流が希薄になりやすい点、KPI などの評価指標が単独拠点と同じである点、制度としてだけではなく直接的な交流が重要になる点が挙げられる。

【意見交換】

- ・ネットワーク型拠点独自の評価指標を検討してもよいのではないかとの指摘があるが、現状もネットワーク型拠点は通常の拠点とは別の基準で審査している。ネットワーク型拠点同士を比較するので、業績の有無で評価が分かれることが必然の状態である。
- ・研究は、解決する必要がある課題を上げて、必要条件を満たしていくという流れになりがちだが、臨床の面では十分条件を満たしていくことも重要である。その面においてネットワーク型の利点を活かしていけると良い。

2. 第 5 期中期目標期間開始に向けた国立大学の共同利用・共同研究拠点の期末評価及び新規認定に向けて

- ・評価意見書は書面審査をする前に目を通したい。簡素化して良いので、できるだけ早く確認したい。